

# 行政、住民、学生、企業、NPOの知恵の交流による地域協働プロジェクト 一市貝町自治基本条例推進会議をプラットフォームとして—

代表者：中村祐司（地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科）

協力者：穆鈺（大学院地域創生科学研究科修士課程1年）、神林泰暢（国際学部4年）、会田瑛（地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科3年）、川口直樹（同）、蒋婷怡（同研究生）、趙子陵（同）

## 本プロジェクト活動の内容・経緯・意義・成果について

市貝町における「サシバの里いちかい基本条例」は、本学学生が2016年度から策定に関わり、2018年12月6日に成立、**19年4月1日から施行されるに至ったものである。**本プロジェクトでは、「町は、この条例が市貝町にふさわしいものであるかを検証する」（第20条）ために設立された「サシバの里いちかい基本条例推進会議」（現名称は、サシバの里いちかい基本条例周知啓発プロジェクト会議。略称さしばの里基本条例会議）をプラットフォームとして、**市貝町の行政、住民、NPOと学生との地域協働プロジェクトを実践することで、とくに第19条「まちづくり」に盛り込まれた理念（住民自治、自然・環境、産業・観光、スポーツ・芸術、歴史・文化）を具体的な活動レベルにつなげる方策を追求した。**

市貝町企画振興課が所管する総合戦略作成等他の負担業務のため、推進会議の開催は2020年1月と出遅れたものの、**プラットフォームとしての今後につながるスタート**を切ることができた。また、この間、研究室メンバーによる市貝町の市政全般についての情報収集活動や市貝町担当職員への聞き取り調査、さらには条例の条文（とくに第19条の「豊かな自然・環境の維承」「歴史・文化の伝承」）との関わりに注目した市貝町現地視察（道の駅「サシバの里いちかい」、武者絵資料館・多田羅沼）を行い、基本条例の記載と実際の現場とのつながりや乖離について考察し、課題を把握し、提言も含め今後の方向性を探った。

**自治基本条例を作りっぱなしで終わらせるのではなく、現地調査、聞き取り、関係者間の交流を通じて、また、学生を含む構成メンバーが知恵を出し合う協働実践の場（上記推進会議=プラットフォーム）を機能させることを通じて、条文の掲げる理念に「協働の実践活動を吹き込む」ことを目的とした。**

まちづくりに近道はない。周縁的で比較的目立たない小規模自治体を対象に、また、住民の認知という点で課題の残る自治基本条例を対象に、本プロジェクトの地道な継続に意義があるのではないか。**住民と行政や関係者間の距離の近さ、政策の規模や地理的な面で現地調査の範囲など、対象地域の把握のし易さといった市貝町の強みを逆手に取ったアプローチを今後とも継続していきたい。**

以下、具体的な経緯を示す。

**2019年7月-12月：市貝町の市政全般に関する情報・資料収集と研究室メンバー間での課題の共有。**対象となった主な関係収集資料として、

- ・市貝町企画振興課「第6次市貝町振興計画 基本構想・前期基本計画 概要版」（2016年3月）
- ・市貝町「人口ビジョン まち・ひと・しごと創生総合戦略」（2016年3月）
- ・市貝町「町制施行40周年記念 市貝町勢要覧2012」（2012年1月）
- ・市貝町「2019年度 市貝いきいきクラブ教室の案内」（2019年）
- ・市貝町「ICHIKAI GUIDE MAP」（2019年）
- ・市貝町「広報いちかい ICHIKAI」（2020年1月号）
- ・宇都宮市「宇都宮市自治基本条例の施行後の取組」（2012年）
- ・日光市「日光市まちづくり基本条例の周知、意識啓発について」（2019年）
- ・江別市「まんがでわかる 江別市 協働によるまちづくり」（2017年12月）

**2020年1月24日：研究室メンバー3名と引率教員1名が、市貝町を訪問し、担当職員（企画振興課職員）への聞き取り、道の駅「サシバの里いちかい」・「武者絵資料館」・「多田羅沼」を視察**

**2020年1月29日：第1回サシバの里いちかい基本条例周知啓発プロジェクト会議開催（なお、第2回会議を同年3月に開催予定）**

遂に念願の第1回サシバの里市貝基本条例プロジェクト会議を開催！

2020年1月29日、於）市貝町役場 新たなスタートを切る！

NPO・まちづくり活動関係者2名、町職員（生涯学習課・健康福祉課等）3名、研究室メンバー5名



設置要綱（2020年1月22日告示第6号）第1条：サシバの里いちかい基本条例を広く町民に周知し、十分な溝通を図るとともに、町民参加と協働のまちづくりを進めるため……

## 上記プロジェクト会議でのメンバーの発言内容（抜粋。事務局説明含む）

- ・議会での条例の可決後、町民にあまり知られていない。
- ・制定後は周知啓発に取り組んでいくとし、本日がそのスタート
- ・この会議の目的は条例そのものを知ってもらうと共に、町民に関心を持ってもらうこと
- ・他の自治体の基本条例の活用事例（江別市など）について情報共有
- ・江別市では大学が積極的に関わリリーフレットを作成
- ・定期的に1年に1回は全戸に届くものを作った方がいい（学生意見）。
- ・クイズ大会（町のことで、自治基本条例のこと）を実施してはどうか（学生意見）。
- ・長い期間を掛けて長い視野で町民に浸透させていく。たとえば小学校の高学年の1コマをもって出前講座を実施、成人式で話題に。ただ配るだけでなく、面白おかしく説明（職員意見）
- ・出前講座の資料を作る時に、この資料だと難し過ぎる。内容をさらにかみ砕くいた方がいいのでは（学生意見）。
- ・自治基本条例がなかったらどうなるの？といった問い合わせをしたらどうか（学生意見）。
- ・自治基本条例自体よりも、その志を知ってもらう方が大切では（まちづくり関係者）
- ・子どもたちに後に彼らに興味をもってもらうきっかけに。税に興味を持つなど（職員）
- ・町内の関係団体にわかってもらう。子どもに理解しやすいのは漫画（まちづくり関係者）
- ・SNSの活用も大（まちづくり関係者）

☆今後の実践に向けて：夏祭りのクイズ大会でコラボ。なかつたらどうなるのという問題設定。専用SNSを学生企画で作成。出前講座を開催。これらについて知恵を絞っていくことに！

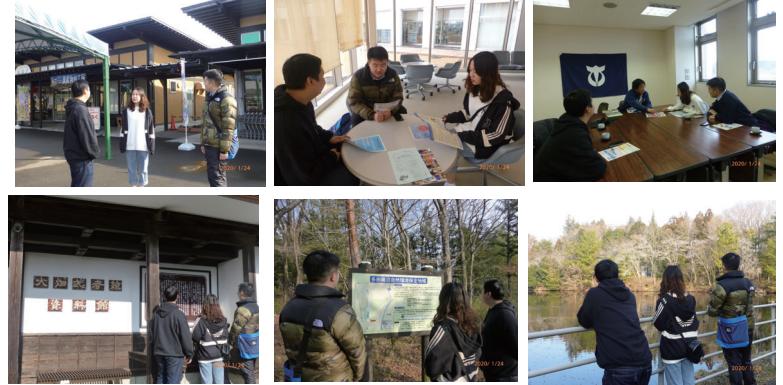
## 収集・検討対象の市貝町関係資料パンフの表紙



## 市貝町「ICHIKAI GUIDE MAP」（2019年）におけるサシバの紹介頁



2020年1月24日：研究室メンバー3名と引率教員1名が、市貝町を訪問し、担当職員（企画振興課職員）への聞き取り、道の駅「サシバの里いちかい」・「武者絵資料館」・「多田羅沼」を視察



## &lt;2020年1月24日の市貝町企画振興課におけるインタビューでのやり取り&gt;

Q：自治基本条例で強調している住民参加の状況は？

A：今後、人口がどんどん減少していく中、東京への一極集中が進む。栃木県の場合は宇都宮市に人が集まっている状況。周辺の自治体は雇用などの面でどうしても力不足。高齢者が増えてくる。どうやって健康や福祉を守っていくかが大切。

たとえば、高齢者のボランティア活動をやってもらうとポイントを与え、これを利用した買い物ができるような仕組みを用意したい。ただ、一方で選舉の投票率の低さなどまだまだ課題がある。自治会への参加を促すために、人々に集まつてもらって元気づくり事業（体操など）を行ななどしている。人々が集まるところで交流が生まれる。

高齢者世帯間の交流を促したい。同時に若い人々のまちづくりへの参加が課題（そもそも地元に若者がない）。人口減少歴止めのための移住を促進したいが、特定のキーパーソンに頼り過ぎるのも問題。

潜在力があるのに埋もれている人々（まちづくりに意欲のある人々）をどう振り起こすかが課題。

若い人々をどう呼び込むか。農業を志す、外から入ってくる若い人々はよく動いてくれる。郷土愛を訴え地元に戻ってほしい。大学進学を機にどうしても町外に行ってしまう。

Q：たとえば北京市の場合、市内外に住んでいる若者は、北京中心部に出て行く傾向があるが。

A：外国からの観光客にいかに町が魅力を提供できるかが課題。語学の問題。受け入れ体制に難がある。

取り込みやすい気持ちがあるが。円滑なコミュニケーションができる人材が不足している。

Q：外国人の人々が市貝町に住みたいとなった場合、市貝町にはその支援策はあるのか。

A：相談窓口一つをとっても対応出来る職員がいない。しかし、町内外にも外国籍の人々はいる。農業の仕事を従事している中国人はいるが、実際には対応できない。町民で窓口となってもらう人がいればいいのだが。

Q：町内の観光地として、どのような形で魅力を発信しているか。

A：たとえば芝ざくら公園は、とくに台湾の人々に人気がある。対応として多言語のパンフレットや放送を行っている。HPやSNS発信も可能な範囲で行っている。

以前、全国放送のテレビで市貝町が最も知られていない町として報道されたことがある。しかし、近年では芝ざくら公園が市貝町の知名度を上げている。その他にも観音山梅の里梅園や武者絵資料館などが魅力的な潜在観光資源である。

サンバは自然環境が良くなければ住めない。南方からやってくる。中国からもやってくる。韓国、台湾、フィリピンからも。暖かくなってくると、1000キロメートル以上の距離を渡って島々を経由して市貝町にやってくる。サンバは市貝町に全国で一番多く住んでいる。

道の駅「サシバの里いちかい」は、5-6年前に設置した。農産物販売が中心である。情報発信の拠点になっている。ただ、茂木町の道の駅と比べると残念ながら売り上げは低い。温泉はあるが赤字運営などが課題。しかし、公的価値があり存続している。その他にも古民家などが挙げられる。

町勢要覧は10年毎に作る（町の歴史の記載などもある）。

「人口ビジョン」「まち・ひと・しごと創生総合戦略」に記載しているように社会減、出産数の減少が大きな課題となっている。50年間に40%の減少が予想されている。この重要課題への対策が総合戦略の柱である。ただ、こうした傾向は中国やインドの年齢階層別人口数推定や人口比率推定を見ても同様な傾向にあるのがわかる。

Q：基礎自治体で働くことのやりがいは？

A：県の場合、直接住民と話す機会がないが、小規模自治体の市貝町では町民との距離が近いのが魅力である。同時に課題もある。たとえば公民館があり、地区的活動があるが、それ以外では町民の集まる場がない。元気づくり事業や地域食堂（子ども食堂）などで打開策を実施している。

## &lt;聞き取りや施設訪問後の研究室メンバーが得た印象や感想&gt;

・日本の地区（公民館所管など）と中国の社区所管の違いなど、事例を深めて勉強すれば、より理解が深まると思った。

・市貝町の規模について宇都宮市との違いなど実感として理解できた。ただ、生活としては正直、宇都宮市の方が、交通網の整備（バス、電車等）など便利だと感じる。道の駅については、非常に好印象を持った。とても魅力だと思った。それは施設が風景に溶け込んでいるからだと思う。

・地方の過疎化が印象に残った。職員の方が指摘していたが、金假活動を通じた行政参加が大切だと感じた。これが問題を解決する切り札となるのではないか。

・道の駅は、自然の雰囲気がよく、たまねぎなど農産物が安いのも魅力。

・多田羅沼について、清潔できれいなベンチあれば、癒やしの空間・休憩地として人々が集まつくるのでは。駐車場の確保も重要なと思う。掲示板の表示がもっとわかりやすければ、管理者がいない。ボランティアを活用（観光の季節に柔軟に）して管理者がいれば安心だ。街灯やトイレが整備されなければ。